

## 橘広相考 一

滝川 幸 司\*

## 要旨

菅原道真の先蹤ともなった、橘広相について、伝記考証を中心に考察を加えた。本稿では、文章博士任官までを扱う。

## はじめに

橘広相は、阿衡紛議の当事者として知られる通り、宇多天皇の側近である。そもそもその父光孝の側近とも思しく、光孝即位とともに参議に昇進したことはそれを示そう。東宮学士、文章博士を務めた儒者であるとともに、詩人としても優れていた。それは、興福寺僧寛建が入唐する際に、唐に於いて流布させるように朝廷から付された詩巻九卷の内二巻が広相のものであったことから明らかである。道真、長

谷雄の各三卷には及ばないもののそれに次ぎ、詩人としての評価の高さが知られる（『扶桑略記』延長五年五月二十一日条所引延喜御記）。しかし、その心情を窺うに足る程に詩文が残されていないのは残念である。

儒者としても詩人としても高い能力を持ち、しかも、阿衡紛議によつて失意の後に卒することになるとはいえ、光孝即位とともに参議に就任し、光孝朝に於ける儀式の復活と整備に携わり活躍したこと<sup>①</sup>は、のちの菅原道真を想起させるものでもある。

広相については、光孝朝以後、特に宇多朝初めの阿衡紛議絡みで取りあげられることが多く、それ以前に触れられることは少ない。そもそも広相の専論はなきに等しく、伝記についても、玉井力「橘広相」（『国史大辞典 第十卷』吉川弘文館・一九八八年）、関口力「橘広相」（『平安時代史事典 下』角川書店・一九九四年）などの辞書的な記述があるのみである。本稿では、広相の生涯を辿る。これまで道真と交流のあった儒者や詩人について伝記考証を行ってきたが<sup>②</sup>、広相自

身は道真との交流は極めて少ないものの<sup>3</sup>、その生涯は明らかに道真の先蹤となっている。広相の、儒者・詩人としての生涯を辿ってみようと思う。但し広相自身の詩文はほとんど残されておらず、その心情や姿勢について論じることが困難なので、基本的には官僚としての足跡を追うことが中心となる。しかし、官界での位置が、広相の立場・姿勢を表してもいるであろう。

## 一、家系

『公卿補任』（元慶八年参議橘広相<sup>4</sup>）は、広相に次のように注している。

贈太政大臣奈良麻呂の五代の孫、兵部大輔島田麻呂の曾孫、伯耆守従五上真材の孫、若狭守従五位上峯範の二男也。母民部大丞藤原末永女。

平安遷都後について述べれば、曾祖父島田麻呂は、正五位下兵部大輔を極官としたらしい（『日本紀略』弘仁八年八月一日条）。島田麻呂が正史に見えるのは、延暦十六年二月十五日に「従五位下橘朝臣島田麻呂を春宮亮と為す」と見える程度で、橘常子の父（前掲『紀略』）、長谷麻呂の父（『類聚国史』卷六十六・薨卒・天長元年二月九日）といふ記録が残るのが管見に入ったのみである。常子は、前掲『日本紀略』弘仁八年八月一日条が薨伝で、

散事従三位橘朝臣常子薨す。左大臣橘諸兄の曾孫、正五位下

兵部大輔島田麻呂の女也。皇統弥照天皇（桓武）、之れを後宮に納れて寵有り。三品大宅内親王を生む。延暦年中、従四位下を授けらる。宮車晏駕して、出家して尼と為る。太上天皇（平城）敬しみて之れを重んじ、従三位に除す。薨する時年卅。

とある。<sup>7</sup>この時に島田麻呂が生きていたか否かは明らかではない。なお、島田麻呂が春宮亮に任じられたときの皇太子は、平城である。

島田麻呂の弟に清友がおり、その女が嘉智子である。嘉智子が嵯峨の皇后となり、仁明の母となったことにより、右大臣まで昇ったのが弟・氏公である。氏公薨伝には、「太后の弟たるを以て、此の顕要を歴たり」（承和十四年十二月十九日条）とある。しかし、氏公の従兄弟となる、島田麻呂男・真材は、正史には見えず、従五位上伯耆守を極官としたのみであった。真材の生没はまったくの未詳である。その男が、広相の父・峯範になるのだが、極官は従五位上若狭守であり、祖父、父と地方官で終わっている。峯範は後述するように貞観九年頃には引退して、まもなく卒したと推測されるが、その従兄弟となる、氏公男・峯継は、貞観二年十月二十九日に正三位中納言で薨じた。皇后・国母が出た清友・氏公の流れとは随分身分的に隔たってしまったようである。もともと、峯継には後嗣が知られず、この系統も後が続かなくなる。<sup>8</sup>

父・峯範は、生没年未詳である。正史に見える最初は、承和十二年正月七日に正六位上から従五位下へ加階された記事である。これ以前

の官歴は定かでない。但し、『尊卑分脈』によれば、対策及第していたらしく、これ以前のことであろう。<sup>9</sup> 対策及第している以上、この加階以前に何らかの官職に就いていたと思われるが、未詳である。<sup>10</sup> 峯範が紀伝道で学んだ時期も明らかにすることはできないが、承和初頃には在籍していたであろうか。得業生となつて献策したのか、文章生のまま方略の宣旨を受けたのかも未詳である。なお、菅原是善が天長十年に得業生に補され承和六年に献策したが（『公卿補任』貞観十四年参議是善）、あるいは同時期に紀伝道に在籍していたか。

承和十三年二月十一日、峯範は中務少輔に任じられた。嘉祥二年六月二十二日の僧円珍位記（平安遺文四四五七）に「従五位下守中務少輔臣橋窄範行」との署名が見える。なおこの時の中務卿は、時康親王である。仁寿二年正月十五日に武藏介となる。斉衡三年正月十二日に藤原大滝が武藏介に任じられているのは峯範の後任であろう。介の任期を終えてからの任官はしばらく見えず、貞観二年二月十四日に図書頭に任じられた。同四年正月七日に従五位上に進み（図書頭）、同年二月十一日に神祇大副に任じられた。同六年正月十六日に若狭守に遷つたのが正史に見える最後である。この時従五位上だが、前掲「補任」に「若狭守従五位上」と見えるから、これが極官であろう。貞観九年正月十二日に島田善宗が若狭守に任じられているが、峯範の任期中であり、卒したか、何らかの事情で辞したためであろう。なお、『尊卑分脈』によれば、阿波守、藏人にも任じられたらしいが、いずれも確認できない。

峯範は、『尊卑分脈』を信ずれば対策及第しているはずだが、官歴に儒官が見えない。峯範以前に対策受験した橋氏を探れば、叔父・常主がいる。常主は、父・島田麻呂の極官を越えて、従四位下参議に至っている（弘仁十三年三月任、天長三年六月二日卒。以上、『公卿補任』）。常主は、『弘仁格』の編纂に携わり（『本朝文粹』卷八・198）、詩作も残る（『経国集』卷十三・148）。官歴も見ても、大学少允、式部少丞、式部大輔など儒官を歴任している（『公卿補任』弘仁十三年参議常主）。峯範の官歴は、常主と比較して、対策及第した官僚としては、不審が残る。

峯範は、橋諸兄曾孫になるが、氏公等の系統とは異なり、島田麻呂が五位に達した程度、真材は地方官で終わっている。そこからの脱却を図つて紀伝道に学んだと推測できるが、結局は父と同じく地方官で終わった。

広相の母は、前掲『公卿補任』に「民部大丞藤原末永女」とあるが、末永に関する資料は管見に入らず、まったくの未詳である。

## 二、出生から対策及第まで

博覧<sup>11</sup>は、承和四年に生まれた<sup>12</sup>。道真（承和十二年生）より八年年長である。道真の詩友・安倍興行とほぼ同年か。<sup>13</sup> 父峯範の当時の官職は不明である。紀伝道に在籍していた可能性もある。前掲「補任」に「二男」と見えるが、『尊卑分脈』などの諸系図に兄弟は見出だせな

い。

博覧の幼年時代に関する資料は管見に入らない。但し、島田忠臣「寄橘神童」(『田氏家集』巻下・199)の「橘神童」を博覧とする説がある。<sup>14</sup> 蔵中スミは、博覧十歳の頃の承和十三年前後の作かというのだが、もしそうだとすれば、当時忠臣は十九歳である。この詩は尾聯に「古書を遍覧すれば幼達するもの多し、空しく了了と称すれども尽く堪へ難し」とある。古書をあまねく見れば、幼くして高い境地に達するものもあるが、空しく褒めそやされて、結局すべてに互って十分ではないのだ、という。今後の精進を期待するかのような内容である。「まだ年若い〔橘神童〕に対する忠臣からの慈愛に満ちた教訓の意も込められよう」と解釈される通りであろう。このような「慈愛に満ちた教訓」を果たして、十九歳の忠臣のものと理解することができるとであろうか。今は博覧とは別の「橘神童」であると考えておく。

なお、忠臣には「題橘才子所居池亭」(『田氏家集』巻上・47)という作もある。この才子についても『大日本史料』寛平二年五月十六日などは、博覧のこととする。「才子」は『田氏家集』ではこの一例しかないが、『菅家文章』を概観すると、文章生になる以前を指す場合が多い。<sup>16</sup> この作は、『田氏家集』の排列から、おおむね貞観十年前後の成立と考えられるが、<sup>17</sup> 博覧は、後述するように貞観二年四月二十六日に文章生に補されるので、それ以後に「才子」とは呼ばれないと思われる。この「橘才子」も博覧ではなからう。

『江談抄』に次のような資料がある。

荒村桃李猶応愛 荒村の桃李は猶応に愛すべし

何況瓊林華苑春 何ぞ況や瓊林華苑の春

橘広相九歳昇殿の詩、暮春と云々。童名は文人と云々。

(『江談抄』巻四・102)

博覧が九歳の時に童殿上して詩を詠んだというのだが、博覧の童殿上については他に見えない。博覧九歳は承和十二年で、天皇は仁明である。幼少の頃に昇殿し詩を賦した例としては、「是善幼にして聰穎、才学日に新し。弘仁の末、年甫十一、徴されて殿上に侍す。常に帝前に於て、書を読み詩を賦す」(『日本三代実録』元慶四年八月三十日は善薨伝)がある。博覧もこれと同様であったか。但し、是善の場合は、父・清公が嵯峨天皇と近い関係であり、その線での昇殿が考えられるが、<sup>18</sup> 博覧の場合、昇殿の理由が明確ではない。服藤早苗<sup>19</sup>が指摘するように、当時、天皇の外戚に当たる児童が侍奉していた例が散見する。実際、橘峯継は幼少から仁明に近侍していたというが、峯継は、氏公男で、仁明母嘉智子の甥に当たる。<sup>20</sup> 博覧も、仁明が嘉智子を母とする縁で近侍したとも考えられるが、<sup>21</sup> 仁明にとつて博覧は、外祖父の兄の曾孫である。かなり遠い関係のようにも思われる。是善の場合は「聰穎」が知られて近侍したようだが、あるいは博覧の「聰穎」が嘉智子の耳に入り、同じ橘氏という縁で侍奉することになったのであろうか。嘉智子は、崩伝に「后亦弟右大臣氏公朝臣と議して学舎を開く。学宦院と名づけ諸子弟に勧めて、経書を誦習せしむ」(嘉祥三年五月五日条)とあるように、橘氏子弟の学問に気を配っていたのだ

から、博覧の能力を知っていた可能性はある。

なお、童名を「文人」というのもここに見えるのみだが、「九歳でみごとに詩句をものした広相の幼名が「文人」というのは、やや出来すぎの感がなくもない」<sup>22)</sup>。

博覧が前引の学館院に寄宿していたかは明らかにできないが、菅原是善の門人として菅家廊下で学んだようだ。恐らく文章生試に備えて勉学に励んだであろう。道真「奉昭宣公書」(『政事要略』卷三十)に「広相は、某が先父相公の内人」とあり、『江談抄』卷五・44にも「先君(是善也)の門人」と見える。

貞観二年四月二十六日、博覧は文章生に補された。二十四歳。「補任」には「貞観二四一文章生(字朝綾)」とあり、字も分かる。「補任」では日付が不明であるが、『古今和歌集目録』都良香に、

貞観二年四月廿六日文章生に補さる(聴右示詩。非を以て韻と為す。五言十二句篇を成す。字都賢)

とある。年月が同じであり、博覧も同時であろう。日付が明らかになる。また、大江匡衡「請重蒙天裁弁定大内記紀斉名称有病累瑕瑾所難学生大江時棟奉試詩状」(『本朝文粹』卷七・178)に次のような文章がある。

聴古楽詩(以臥為韻。百廿字成之)

題者少輔大江音人

都良香及第の詩、……藤原淵名及第の詩、……高階令範及第

の詩、……聴古楽詩の題者、則ち江家先祖音人卿、判に預るは文章博士菅原是善卿なり。

これによって、奉試題が「聴古楽」、題者大江音人、判者菅原是善であったこと、同時及第が良香、淵名、令範であったことが分かる。

この頃の文章博士は、菅原是善である。是善は、承和十二年三月五日に任じられて以後、貞観九年二月十一日に、巨勢文雄、博覧に交替するまでその地位にあった。

博覧と同時期の文章生としては、同時及第以外では、古藤一覽<sup>23)</sup>によれば、潔世王が貞観二年十一月十六日に見える。菅原道真が貞観四年四月十四日に奉試、五月十七日に及第している(『菅家文章』卷七・552)。味酒文宗が貞観三年九月二十六日に見える。なお、有名王、坂上斯文が貞観四年以前に文章生に及第しているが、同時期であるかは厳密には未詳である。

この頃、博覧は、右大臣藤原良相邸で開かれた詩会の序者となっている。賦冬日可愛

橋広相

貞観の初、大階平にして、寰海静なり。右丞相客館を開き、以て英才を延く。枝中丞をして毎句試みるに文章筆札を以てし、其の高下を第せしめ、随ふに賞賚を以てす。盛んなる哉洋々たる美、周公哺を吐き、魏帝席を虚しうすと雖も、何を以てか旃に加へん。相公の両子、年皆成童なり。風度清格、

文藻日に新たなり。亦預りて学士の列に在り。自餘の數子、各の詩篇有り。故に具に名姓を録せざるなり。十一月中旬の試、冬日愛すべしといふことを賦し得たり。請ふ格律を共にし文を成さんと云ふこと爾り。

(『本朝文粹』卷八・203)

この詩序を含め、本詩会については、後藤昭雄<sup>26)</sup>に詳細な読解と解説があるので参照されたいが、この詩序によれば、貞観の始、良相が「客館」を開いて「英才」を招き、毎句「枝中丞」(大枝音人)に「文章筆札」を試みさせ、その「高下」を判定して賞を賜ったというのである。これは良相薨伝にいう「時に学生の能文の者を喚びて、詩を賦せしめ物を賚ふこと数なり」(『日本三代実録』貞観九年十月十日条)にも対応する。しかも、単なる詩会とは異なり、「試」が行われており、一種の勉強会とでもいえる場である。さらに序文によれば、良相の二人の子息も参加し、「学士の列」に連なっている。

「貞観の初」は、後藤の考証によれば、貞観元年から四年までであり、詩序中に「十一月中旬の試」と記されるので、そのいずれかの年の十一月となる。博覧が文章生に補された前後いずれかになるが、もう少し開催範囲を狭められそうである。

島田忠臣に「冬日可愛」(『田氏家集』卷上・22)があり、この時の作である。忠臣は『外記補任』貞観八年に「(少外記) 島田忠臣(二月二十三日任。元越前権少掾五年文章生)」と記されるのだが、ここにいう「五年」は文章生散位を意味し、忠臣は、越前掾を終えて貞観八

年まで五年間を散位として過ごしていたよう<sup>27)</sup>だ。とすれば、貞観三年頃には京に戻っていたことになるので、この会は、貞観三年か四年の十一月に開かれたことになる。博覧も既に文章生となっていた頃である。

この詩会は、後藤も指摘するように「自分の子供たちも参加させて、前途有為の若い文人たちに詩詠作の訓練の場を提供しようとした良相の意図のもとで行われたもの」であろうが、興味深いのは、詩序にしろ忠臣の詩にしろ、場の主催者である良相を称賛する表現が見られないことである。詩会が開かれる際には、その主催者を称え、参加できた喜びを詠むことが通例である。しかし、博覧の詩序には、冒頭天下太平は述べられるが、特段良相を称えた表現はない。忠臣詩も良相には触れず、尾聯は「生れて聖運仁を垂るる日に逢ひ、光耀多く添ふ徳政の温かき」と「聖」天子の「仁」「徳政」を称揚しており、本詩だけを読めば、宮廷詩宴での作かと誤解してしまう程である。あるいはこの「句試」は、宮廷詩宴での詠作を学ぶ場であったのだろうか。<sup>28)</sup>

博覧と良相の関係はこれ以前には見えない。しかし、良相は、前掲薨伝に記されたように「学生の能文の者を喚ぶ」ぶことがあったというのだから、博覧の才能を知り、招いたと考えられようか。

貞観五年二月十日、越前権少掾も任じられた(『補任』)。文章生外国であろう。『除目抄』に「此内(『文章生』三人外国掾に任ぜらる

（割注略）。多く宰府・北陸・山陰等道国掾に任せらる。是れ渤海の客人朝の時、問答、文章の心有るべき也」とあるのに当たる。しかし、翌年四月には藏人に補されるので、一年餘りの任期となる。『国司補任』<sup>29</sup>によって同僚を一覧すれば以下のようになる。

守

清滝藤根？（貞観2・11・7任〜離任時期不明）<sup>30</sup>

権守

正躬王（貞観5・2・10任〜5・5・1卒）

源寛（貞観6・1・16任〜7・1?）

介

藤原清身（貞観6・1・7見）

菅野佐世（貞観6・1・16任）

博覧が越前権少掾に任じられたのは、『除目抄』という通り「問答、文章の心」があるからであろうが、任期を待たずに、藏人に補され都に戻った。

貞観六年四月、博覧は、藏人に補された（補任）<sup>31</sup>。『藏人補任』<sup>32</sup>は、貞観九年正月七日に叙爵されて去ったとする。但し、博覧の藏人は、この「補任」以外に知られない。

『藏人補任』によって、同僚を一覧すれば、以下のごとくである。

頭

藤原良世（貞観6・1補〜12・1・13去）

藤原興邦（貞観6・1補〜7・3辞）

良岑清風（貞観7・4補〜8・10辞）

源興（貞観8・11補〜10・10去）

藏人

良岑晨直（貞観6・1補〜9・1・7去）

藤原高藤（貞観7・10補〜10・1・7去）

この貞観六年は、正月に頭二人が交替し、藏人も晨直が補されている。大きな異動があり<sup>33</sup>、それに遅れて四月に博覧が補されたことになる。越前権少掾の任期を待たずに藏人に補されたのは、何かしら事情があるように思われるが、明らかにできない。また、不審が残るのが、この直後に博覧が対策及第していることである。

「補任」によれば、貞観六年八月八日、博覧は対策及第した。もちろん、文章得業生を経ずに方略の宣旨を受けて献策した例はある。菅野惟肖は、文章生のまま献策したし（都良香「評定文章生従七位上菅野朝臣惟肖对策文第事」『都氏文集』卷五）、滋野貞幹は、一旦相模掾という外吏に任じられて献策した（『類聚符宣抄』卷九・方略試）。しかし、藏人に補されたままの献策は、後代の秀才藏人以外には管見に入らない。あるいは、博覧は、文章得業生に補されたのであろうか。「請准抛旧例、被下 宣旨、以正六位上行因幡大掾大江朝臣通国、令奉方略試状」（『朝野群載』卷十三）に、方略の宣旨を受けて献策した例として、「貞観菅野惟肖、滋野良幹」を上げるが、博覧は入ってお

らず、これに基づけば、得業生に補されて献策したと考えられる。もし得業生に補されたとすれば、貞観五年二月の任越前権少掾は、対策までの給与支給を目的とした、文章得業生の兼国ということになる。例えば、大枝音人は、承和四年に得業生となり、翌年に備中目を兼任している（『公卿補任』貞観六年参議音人）。道真は貞観九年に得業生となり、同年二月二十九日に下野権掾に任じられている（同前寛平五年参議道真<sup>34</sup>）。博覧も早ければ前年、遅くともこの貞観五年には得業生に補されたと考えられる。以下、得業生に補されたと仮定して、再び博覧の足跡を辿ってみる。

貞観五年に入って補されたとすれば、文章生から三年で得業生となったことになる。博覧は二十七歳である。得業生となった年齢としては、是善が二十二歳、道真が二十三歳で、それより遅れるが、道真は十八歳で文章生なので、五年経っている。是善は、文章生期間が不明、音人は、天長十年に文章生、承和四年に二十七歳で得業生となる。得業生となった年齢は同じようだが、音人は、得業生まで四年かかっている（以上、基本的に『公卿補任』による）。博覧はこれよりも早いことになる。極めて早く文章生から得業生に転じたことになる。得業生制度は、そもそも、大学の学生が経済的な裏付けのないために好学の志を遂げられない状況を改善するべく、「性識聡恵、藝業優長なる者十人以下五人已上」（『統日本紀』天平二年三月二十七日条）を選んで衣食を支給することを請うて承認されたものである<sup>35</sup>。また、後

代のものであるが、「文章生廿人中、才学拔萃なる者二人を択びて得業生に補すは歴代の通規也」（『応補文章得業生正六位上藤原朝臣実範事』『類聚符宣抄』卷九・文章得業生試）ともいう。博覧は、性識聡恵、藝業優長、才学拔萃なるをもって得業生に補されたのだが、三年という短期間は、その優秀さを示そう。

この時期の得業生としては、貞観二年六月十四日に味酒（巨勢）文雄が対策及第して加階している。貞観五年八月九日に菅野朝臣姓を賜る御船助道（菅野助道）は、貞観六年正月二十七日少外記に任じられているが（『外記補任』）、それ以前に対策に落第したらしい<sup>36</sup>。忠臣「過田大夫莊呈船秀才」（『田氏家集』卷上・2）に見える「船秀才」は助道であると推測され、得業生であったことが確認できることになる。すなわち、貞観五年八月以前に得業生であった<sup>38</sup>。また、貞観八年正月七日には、大中臣国雄が既に文章得業生として見えている。

文章得業生の定員は二名なので、恐らく文雄と助道が重なり、文雄の後に博覧が補され、助道とはわずかながら重なり、助道の後に国雄が補されたか。

後代、秀才藏人として、優遇される出身形態が見られるようになるが、岸野幸子の調査によれば<sup>39</sup>、醍醐朝以降に見られ、博覧の例はかなり早く、孤立している。文章生のまま藏人に補された例としては、滋野貞主がいる（『公卿補任』承和九年参議貞主）。進士藏人についてもおおむね醍醐朝以降に見られるものだが、弘仁八年の貞主の例につい

て、岸野は、勅撰集に作品を残し、「嵯峨天皇との間に何らかの私的関係があった」ことに理由を求めている。<sup>40</sup>それは、後代の進士・秀才蔵人が、「天皇や摂関家との直接乃至間接的な関係によって実現したものである」であったことに通じるからでもある。進士・秀才蔵人について、岸野は「天皇や摂関など、時の権力者との人的関係によって生み出されたものであった」と述べる。<sup>41</sup>

博覧の秀才蔵人も貞主同様、時期的に孤立した例だが、貞主や後代の例を勘案すれば、天皇か摂関家との関係に理由を求めるしかなからう。しかし、当時天皇の清和は十五歳である。この貞観六年正月一日に元服したとはいえ、清和が博覧を抜擢したとは考えにくい。太政大臣藤原良房の意図と見るべきか。これ以前に良房と博覧の関係は知られないが、短期間で得業生に補された優秀さが良房の耳に入ったとも考え得るか。前述したように、良相邸での文事に参加しており、のちの博覧は、陽成の東宮学士ともなり、陽成朝では蔵人頭を務めることく〔補任〕。当時陽成は十歳、陽成の近臣といえる立場になるが、これも摂関家との関係を想定すべきことであろう。

以上、文章生から出身し、外吏、蔵人を経て献策した場合、得業生に補されて献策した場合を述べたが、果たして、いずれがより事実に近いのであろうか。資料的には、得業生を経ていないことになるが、蔵人から献策したこと、方略の宣旨を受けた先例として見えなかったことが疑問となる。得業生に補されたとすれば、そもそも「補任」に

漏れたこと、秀才蔵人の例が孤立することが疑問点となる。いずれとも今は決しがたい。

貞観六年八月八日、博覧は対策及第した。<sup>42</sup>博覧の献策時期、策問などすべて未詳である。献策から判までの期間は、例えば、菅原是善は、承和六年七月二十六日献策、同年十一月一日及第〔『公卿補任』貞観十四年参議是善〕で三箇月強、菅原道真は、貞観十二年三月二十三日献策、同年五月十七日及第〔『菅家文草』巻八・566、567〕省試対策文二条〔自注〕で二箇月弱かかっている。博覧も二三箇月前の献策であつたらうか。

対策及第時、博覧は二十八歳である。博覧は、二十四歳で文章生に補されたが、この年齢は特段早いほうではない。例えば、菅原清公は二十歳で補されたと推測されるし（承和九年十月十七日薨伝）、藤原衛（天安元年十一月五日卒伝）、正躬王（貞観五年五月一日卒伝）、道真〔『菅家文草』巻七・552他〕は、十八歳である。しかし、博覧は二十四歳で文章生、二十八歳で対策及第しており、文章生から対策及第まで足かけ五年しか経っていない。道真の対策及第は前述のごとく貞観十二年五月十七日であるが、この時二十六歳。年齢では道真が若い方が、十八歳から足かけ九年かかっている。二十歳代での及第も極めて早いのだが、費やした期間の短さは特筆すべきで、博覧の才学を物語るものであろう。<sup>43</sup>

対策及第すれば、その成績に応じて加叙されるはずである。当時、成績の多くが「中上」であり、「中上」であれば、三階進むことになっていた。<sup>(44)</sup> 例えば、味酒（巨勢）文雄は「前文章得業生正八位下味酒首文雄、三階を加叙す。対策及第を以て也」（貞観二年六月十四日条）と対策及第して三階を進められているが、これは成績が中上であったことを示すし、道真については「文章得業生正六位下菅原朝臣道真、一階を加叙す。対策中上第を得るを以て也。須らく格旨に依りて三階を加へ進むべきも、本位正六位下なり。仍りて一階を叙す」（貞観十二年九月十一日条）とあるのは、中上であれば三階進むべきだが、三階進めると五位を越えるので、一階だけ進め、正六位上に叙したという。それでは及第した博覧はどのように加叙されたのであろうか。博覧のこの時期の位階については明らかでないのだが、博覧は、貞観九年正月七日に、正六位上から従五位下に加叙されており、恐らく対策及第時に正六位上に叙されたと推測される。三階進められたとすれば、対策時従六位下だったことになる。しかし、『藏人補任』貞観六年は、博覧の補藏人時点での位階を「正六上」とする。『藏人補任』が正しいとすれば、対策及第したのにも拘わらず、博覧は加叙されなかったことになり、疑問が残る。のちの例ではあるが、道真も五位に達しないように、正六位上で留められていた。しかし、一階も進まないということは、対策及第したものに對してあり得るのであろうか。『藏人補任』の誤りか、対策及第してもまったく加階されなかったことになるのか。この辺り、資料的に明らかにすることが困

難である。

### 三、出身から東宮学士、民部少輔

貞観八年正月十三日、右衛門大尉に任じられた（補任）。<sup>(45)</sup> 『藏人補任』は藏人との兼任とする。貞観九年二月十一日の文章博士就任とともに離れたと推測される。その頃までの任となる。同僚について、『衛門府補任』<sup>(46)</sup>に基づき、私に見出したものを加えて一覧すると以下のようなになる。

右衛門督

藤原良繩（貞観5・2・10任〜10・2・18卒）

右衛門佐

伴中庸（天安2・9・14任〜貞観8・9・22解）

右衛門権佐

藤原広基（貞観7・6・23見、8・1・13、23見）

右衛門少尉

藤原清経（貞観8・1・21任〜9・1・12転）<sup>(47)</sup>

貞観八年は、応天門の変が起こった年でもある。そして、上司の一人、伴中庸は「いまでもなく伴善男の子であるが」、変によって解任、左遷された。応天門の変の中で、博覧が何を感じたか、どのように関わったか、知る術はない。

この応天門の変前後の政情不安の中、是善の同門が友人宅を訪れ詩

会を開いた。忠臣の次の作は著名である。

春日仮景訪同門友人 島田忠臣

友道交情常欲深 友道の交情常に深からんことを欲す

適将何事効知音 適に何事を持てか知音を効さん

儒家問善詩無用 儒家問ひ善ふ詩は無用なりと

〈近来盛善詩人無用〉 〈近来盛に詩人無用と善ふ〉

王法新行酒莫淫 王法新たに行はれ酒淫すること莫からしむ

〈有令不放人之群飲也〉 〈令有りて人の群飲を放さざる也〉

世上崎嶇多失脚 世上崎嶇として失脚多し

花前暗淡不留心 花前暗淡として心を留めず

只今鄭重来相訪 只今鄭重に來りて相ひ訪へるは

為是同門契断金 是れ同門の断金を契らんが為なり

〔田氏家集〕卷上・44

この詩は、四句目の「王法」が『日本三代実録』貞観八年正月二十三日条所引の勅を指すと考えられることから、それ以後の作である。「儒家」から「詩人無用」の声が発せられたというのであるが、この詩が、応天門の変前後の世上不安な中で詠まれたものであることは既に指摘があり、「詩人派」と「儒家派」の対立が想定されている。<sup>48</sup>

「詩人無用」の声が、菅原道真の詩人意識を強めていったことは既に通説となっている。<sup>49</sup> この作が貞観八年に詠まれたとして、道真は文章生であり、この詩の作者・忠臣は、正月時点では散位で二月に少外

記に任じられた頃である（『外記補任』）。この詩は、同門が集まったの詩会で詠まれたのであろうから、「詩人無用」の声は、「同門」は善門下に向けられたのであろう。それは直接的には、そのトップであり、当時文章博士であった是善に向けられたと考えるべきであろう。<sup>50</sup> すなわち、是善への批判として捉える必要があると考えられる。

「詩人無用」の声に圍繞された是善門下が集まったこの詩会に、同門である博覧が参加したのかは明らかではない。是善門下である博覧にも当然「詩人無用」の声は聞こえていたであろう。その中で彼はどのように考えたのか。道真は「詩臣」という立場を強固に自覚していることで、それに対峙しようとしたようだが、博覧はどうかであったのか。博覧の心情を知る方法がないのは残念なことだが、彼の生涯を追うことで見えてくるものもあるう。

貞観九年正月七日、「正六位上……右衛門大尉橋朝臣博覧……並びに従五位下」と、従五位下に加階された。三十一歳。なお、『藏人補任』は、この五位昇叙によって藏人から離れたとする。

同年二月十一日、博覧は文章博士に任じられた。正史は「民部少輔従五位下巨勢朝臣文雄、従五位下行右衛門大尉橋朝臣博覧、並びに文章博士と為す」と記す。<sup>52</sup>

これ以前文章博士は、菅原是善が二十年餘り務めており、その後任である。是善の離任が先述の「詩人無用」の声と関わるかはさらなる

検証が必要だが、後任となった巨勢文雄はいわゆる「儒家派」大江音人の弟子であり（貞観十九年十一月三日音人薨伝）、博覧は「詩人派」ともいわれる是善の弟子である。

博覧は、貞観十一年二月一日に東宮学士に任じられて離れるまで、二年間博士を務めた。博覧の博士在任中、貞観九年に道真が得業生に転じ（『公卿補任』寛平五年参議道真）、道真の詩友・安倍興行がこの頃得業生であつたらしい。また、都良香が貞観十一年六月十九日に对策及第しているので（『古今和歌集目録』）、恐らく博覧の博士在任中に紀伝道に在学していたであろう。

博士に任じられた時、博覧は三十一歳である。これはこの時期としては極めて若い。同時に任じられた文雄は四十四歳。例えば、菅原清公は弘仁十年正月に五十歳で任じられており（『公卿補任』承和六年非参議清公）、是善が承和十二年三月五日に三十四歳で任じられたのが、かなり若い例であつたが、それよりも博覧はさらに若いのである。道真が任じられたのは、元慶元年十月十八日で三十三歳。昔家は、祖父清公以来文章博士に任じられていたし、道真は参議是善男でもある。早い任官も理解できなくはないが、博覧にはそのような背景・基盤はない。にも拘わらずこの若さで博士となつたのは、やはりその才学を認めるべきなのであろう。

貞観十年十月十日、右大臣藤原良相が薨じた。五十五歳。良相は応天門の変後、貞観八年十二月一日に基経が参議正四位下から中納言従

三位に昇進したその日に辞表を提出し、しばしば上表するも許されず、この日に薨じたのであつた。良相は、伴善男とともに、応天門炎上を源信のしわざと糾弾するも、良房は信をかばい、結果、善男が断罪され、良相も良房によつて圧迫されたと考えられている。<sup>53</sup> 前述したごとく、博覧は良相邸の文事に参加し、序者となつていた。博覧の才能を見出した一人であつたろう。そして、その良相を圧迫した良房は、博覧の補藏人に関わつたと思しい人物であり、後述するように、貞明親王（陽成）―母は応天門の変後の十二月二十七日に女御となつた高子―の東宮学士に抜擢したと考えられる人物である。

〔未完〕「橋広相考 二」（奈良大学紀要41・二〇一三年）に続く

## 注

(1) 木村茂光「光孝朝の成立と承和の変」（十世紀研究会編『中世成立期の政治文化』東京堂出版・一九九九年）。

(2) 拙稿「安倍興行考」（奈良大学紀要36・二〇〇八年）、「巨勢文雄考」（奈良大学紀要38・二〇一〇年）、「島田良臣考」（奈良大学大学院研究年報16・二〇一一年）、「菅野惟肖考」（奈良大学紀要39・二〇一一年）。なお、道真の祖父、父については、「菅原清公伝考」（古代中世文学論考第四集）新典社・二〇〇〇年）、「菅原清公伝年譜―附「菅原清公伝考」補遺―」（詞林31・二〇〇四年）、「菅原是善伝考 上」（奈良大学大学院研究年報17・二〇一二年）、「菅原是善伝考 下」（奈良大学紀要40・

- 二〇二二年)。
- (3) 道真「奉昭宣公書」(『政事要略』卷三十)において、同門の広相について、「広相者某先父相公之内人。然而未曾聞<sup>四</sup>為<sup>五</sup>某有<sup>六</sup>恩恕<sup>七</sup>」という。「菅家文章」を見ても直接の交流は知られない。
- (4) 以下、誤解の恐れのない限り「補任」と略す。
- (5) この当時の橋氏については、安田政彦「九世紀の橋氏―嘉智子立後の前後を中心として―」(帝塚山学院大学研究論集28・一九九三年)に詳しい。
- (6) 正史から引用する場合には、出典名は省略し年月日のみ記す。
- (7) 但し、三十歳という年齢には疑問がある。常子は、延暦十五年十一月十四日に従五位上に叙せられているが、薨伝を信ずればこの時九歳となる。
- (8) 安田前掲論文参照。なお、承和の変において橋逸勢が罪に服し、橋氏も連坐者を出したものの、早くに許されている。この点も、安田前掲論文参照。
- (9) 古藤真平「『登科記』八・九世紀文章生、文章得業生、秀才・進士試受験者一覽(稿)」(『國書逸文研究』24・一九九一年)参照。
- (10) 岸野幸子「文章科出身者の任官と昇進―藏人との関係を中心に―」(『お茶の水史学』42・一九九八年)によれば、及第後の任官としては、大学少允・少内記などがある。
- (11) 貞観十年十月十一日に改名するまで、この表記で示す。
- (12) 寛平二年五月十六日に五十三歳で卒(『公卿補任』寛平二年参議広相)。
- (13) 拙稿「安倍興行考」(前掲)において、興行を承和二年頃生と推測した。
- (14) 『大日本史料』寛平二年五月十六日、藏中スミ「島田忠臣年譜覚え書」(『田氏家集注 卷之上』和泉書院・一九九一年)。
- (15) 『田氏家集注 卷之下』(和泉書院・一九九四年)当該詩注(山本登朗担当)。
- (16) 拙稿「安倍興行考」(前掲)注44参照。
- (17) 「春日假景訪同門友人」(『田氏家集』卷上・44)の、四句目自注に「有<sup>レ</sup>令不<sup>レ</sup>放<sup>二</sup>入之群飲<sup>一</sup>也」と禁令のことが記されるが、『日本三代実録』貞観八年正月二十三日条に引用される勅に当たる。「送常陸中別駕之任(探得山字)」(同前・51)の「常陸中別駕」は常陸介某中某氏で、貞観七年正月二十一日に大中臣朝臣真主が常陸介に任じられている(『田氏家集注』は、排列からこれに疑問を持つ)。「菅著作講漢書門人会而成礼各詠史」(同前・55)は、菅原道真に「漢書竟宴、詠史得司馬遷」(『菅家文章』卷一・63)があり、同時と思われる。道真の「著作」は内記期間は、貞観十三年三月二日から同十五年正月までであるから(正月十五日に任兵部少輔以上、『公卿補任』寛平五年参議道真)、これもその時期となる。
- (18) 拙稿「菅原是善伝考 上」(前掲)。
- (19) 服藤早苗「童殿上の成立と変容―王権と家と子ども―」(『平安王朝の子どもたち―王権と家・童―』吉川弘文館・二〇〇四年、一九九七年初出)。
- (20) 服藤前掲論文。
- (21) 『類聚本系江談抄注解』(武蔵野書院・一九八三年)当該条・余言もそのように解している。
- (22) 『類聚本系江談抄注解』(前掲)当該条・余言
- (23) 但し「内人」の語、疑問。新訂増補国史大系頭注に「恐当<sup>レ</sup>作<sup>レ</sup>門」とするのに従うべきであろう。
- (24) 「聴石示」は「聴古案」の誤写であろう。後掲、大江匡衡「請重蒙天裁弁定大内記紀奇名称有病累瑕瑾所難学生大江時棟奉試詩状」(『本朝文粹』卷七・178)参照。
- (25) 古藤前掲論文。
- (26) 後藤昭雄「『冬日愛すべし』を賦す詩の序(橋 広相)―詩文の作られる場(一) 大臣の邸宅」(『本朝文粹抄 二』勉誠出版・二〇〇九年、二〇〇六年初出)。

- (27) 拙稿「島田忠臣の位置」(中古文学9・二〇一二年)。
- (28) 以上のことは、拙稿「藤原基経と詩人たち」(語文8485合併号二〇〇六年)に触れた。
- (29) 宮崎康充編『国司補任 第二』(続群書類従完成会・一九八九年)。
- (30) 清滝が任期を全うしたとすれば同僚となる。藤根の後に見える守は、貞観七年正月七日任の弘宗王。
- (31) 「補任」には「同六四―藏人(廿七)」とあるが、博覧の二十七歳は、貞観五年であり矛盾する。今は「藏人補任」貞観六年が「正六上橘広相(二十八)」とするのに従う。なお、「正六上」という位階については疑問が残る。このこと後述。
- (32) 市川久編『藏人補任』(続群書類従完成会・一九八九年)。
- (33) 同年正月一日に清和が元服したことと関わるか。
- (34) なお越前国司に任じられた例としては、博覧よりは後だが、三善清行(越前権少目)、『公卿補任』延喜十七年参議清行)、藤原元方(越前大掾。同前天慶二年参議元方)の例がある。
- (35) 古藤真平「文章得業生試の成立」(史林74―2・一九九一年)。
- (36) 菅原道真「哭菅外史奉寄安著作郎」(『菅家文章』巻一・47)に「少日垂帷疲<sub>レ</sub>蠹簡、当年对策落<sub>レ</sub>龍門」と、「菅外史」(菅野助道)が落第したことが見える。
- (37) 藏中スミ「島田忠臣年譜覚え書」(前掲)。
- (38) 御船(菅野)助道については、拙稿「安倍興行考」(前掲)参照。
- (39) 岸野前掲論文。
- (40) なお、嵯峨天皇と貞主の関係については、金原理「滋野貞主考」(『平安朝漢詩文の研究』九州大学出版会・一九八一年、一九七八年初出)参照。
- (41) 岸野は、貞主の進士藏人について、時期的に不審があり、根拠となる資料も「公卿補任」しかないことから、疑問を呈してもいる。この点は、
- (42) 博覧も同様である。
- (43) 『江談抄』巻五・63に「又云、広相献策之時、七日之中見<sub>レ</sub>一切経。凡書籍皆横見之」とあり、献策の時に七日の内に「一切経」をすべて見たという。
- (44) 延暦二十一年六月八日格(撰叙令集解・秀才出身条所引)による。野村忠夫「官人出身法の構造―慶雲三年二月十六日条をめぐって―」(『律令官人制の研究 増訂版』吉川弘文館一九七〇年、一九六二年初出)参照。
- (45) この任官について、『江談抄』巻五・64に「又云、広相任<sub>レ</sub>左衛門尉。是善卿不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>許<sub>レ</sub>此事云々」とある。「左」は「右」の誤りであろうが、是善が「この事を許されず」という事情は明らかではない。この話柄そのものにどれ程の事実性があるかも疑問だが、武官に就くことに問題があったのだろうか。
- (46) 市川久編『衛門府補任』(続群書類従完成会・一九九六年)。
- (47) 『公卿補任』(昌泰三年参議清経)に拠る。
- (48) 彌永貞三「春日暇景の日―応天門の変と道真をとりまく人々―」(新訂増補国史大系月報25・一九六五年)、後藤昭雄「文人相軽」(『平安朝漢文学論考 補訂版』勉誠出版・二〇〇五年、一九七三年初出)など。
- (49) 後藤昭雄「文人相軽」(前掲)。
- (50) 拙稿「菅原道真における〈祖業〉」(伊井春樹編『古代中世文学研究論集 第二集』(和泉書院・一九九九年)、「菅原道真の「言志」」(和漢比較文学会編『菅原道真論集』勉誠出版・二〇〇三年)。
- (51) 拙稿「菅原道真の位置―儒家から見た詩人無用論―」(国語と国文学88―11・二〇一一年)。

- (52) 「補任」には、「二月十一文章博士（辞而不<sub>レ</sub>就）」とあって、辞して任に就かなかつたとあるのだが、これ以後も文章博士として見える。辞した  
が許されなかつたのであるう。
- (53) 拙稿「菅原是善伝考 下」（前掲）参照。
- (54) 拙稿「安倍興行考」（前掲）。
- (55) 佐伯有清『伴善男』（吉川弘文館・一九七〇年）など。